

現代ギリシャ語の前置詞と 意味条件「領域」「絶対・相対定位」

橘 孝 司

0. 問題点の設定

現代ギリシャ語の語彙体系を古代ギリシャ語のそれと比較した場合、その特徴の一つとして、前置詞の数の減少が挙げられる。現代語にあつては、主要な前置詞（前置詞+名詞句）の構造を持ついわゆる単純前置詞 simple prepositions⁽¹⁾）は次の四つに過ぎない。

（〔 〕は一般に記述されている主要な意味）

από	[Ablative, Genitive]
σε	[Locative, Allative, Dative]
με	[Instrumental, Comitative]
για	[Beneficiary] ⁽²⁾

各々の意味から明らかなように、空間概念の表現に関わるのはこれらのうち、最初の二つ από と σε のみである。したがって、より細密な空間表現はこの二つの単純前置詞と様々な空間副詞（πάνω「上方に」、κάτω「下方に」等々）との結合によって表現される。（この副詞+単純前置詞の構造は、一般に複合前置詞 complex prepositions と呼ばれる⁽³⁾。）

(1) Υπάρχει ένα βιβλίο πάνω στο τραπέζι.⁽⁴⁾

「机の上に本が一冊ある。」

(2) Η γάτα κάθεται κάτω από την καρέκλα.

「猫は椅子の下に座っている。」

(1-2)では定位対象 located objects である「本」「猫」の空間位置が基準点 reference points)の「机」「椅子」との関連により表現されている。（以下、X+(副詞)+単純前置詞+Yの構造におけるXを「定位対象」、Yを「基準点」と呼ぶことにする）

副詞+単純前置詞の構造をもつ複合前置詞において、二つの項の間に可能な全ての組み合わせが実際に許される訳ではない。σεとαπόのいずれの前置詞が選択されるか、は以下に掲げるように、結合する空間副詞の種類によって決定される⁽⁵⁾。

α. σε/απόのいずれとも結びつき、意味的差異が有る副詞

πάνω「上方に」、μέσα「内部に」

β. σε/απόのいずれとも結びつき、意味的差異がない副詞

μπροστά「前方に」、απέναντι「向かいに」、γύρω「周囲に」、ανάμεσα「間に」
γ.σεとのみ結びつく副詞

κοντά「近くに」、δίπλα/πλάι「そばに」

δ.απόとのみ結びつく副詞

κάτω「下方に」、πίσω「後方に」、έξω「外部に」、μακριά「遠くに」

このように、空間表現にはσεとαπόが不可欠であるが、この両者の意味的対立を、単純前置詞と複合前置詞の両用法において過不足無く記述するためには、この二つの前置詞にいかなる意義素を設定すべきであるか？本稿で論じられるのはこの問題である。検討されるべき意味概念として「接触」「近接」「領域」の三つがとりあげられる。さらに、これらの意味条件では説明しきれない例のために「絶対定位」と「相対定位」の区別が導入される。

1. 「接触」(Contact)

まず、比較的明確であるとされているπάνω「上方に」と二つの前置詞の結合から考察を始めるよう。"πάνω σε"と"πάνω από"の相違は「定位対象」と「基準点」の間の「接触」の有無である、とする説が一般的である⁽⁶⁾。疑いなく、この意味条件は多くの例に対して有効な説明原理となる。

(3) Τάραχει μια λάμπα πάνω στο τραπέζι.

「テーブルの上にランプが置いてある。」

(4) Μια λάμπα κρέμεται πάνω από το τραπέζι.

「テーブルの上にランプがぶら下がっている。」

(3)のように、定位対象「ランプ」と基準点「テーブル」との間に「接触」が認められる場合にはσεが選択され、逆に、両者間に「接触」が無い場合、(4)に見られるようにαπόが選ばれる。

しかしながら、様々な例を観察してみると、この意味基準では厳密にうまく説明できない場合がある。それらは以下の3グループに分類されよう。

A. 「定位対象」と「基準点」の間に別の対象が存在しても（両者が直接「接触」してなくても）、πάνω σε が用いられる場合がある。

(5) Τάραχει ένα βιβλίο πάνω στο πάτωμα. 「床の上に本がある。」

(「本」と「床」の間に別の対象、例えば「絨毯」があっても適格)

B. 言語外的に「接触」があっても、πάνω από が用いられる場合がある。

(6) Φορώ πουλόβερ πάνω από το πουκάμισο.

「シャツの上にセーターを着ている」

(指示される言語外的状況に於いては、「シャツ」と「セーター」との間には「接触」が

あると考えられる)

C. 言語外的に明確な区別が認められないにもかかわらず、πάνω σεとπάνω απόの両者が使用されている場合がある。

(7) Το βλέμμα του καρφώθηκε σε μια περίεργη σιλουέτα σκυμμένη πάνω σ' ένα
κουφάρι.

「彼の視線は死骸の上に屈み込む奇妙な影に釘付けになった。」

(8) Μ'ένα δαυλό στο δεξί χέρι είχε σκύψει πάνω απ' το πρόσωπο ενός νεκρού.

「右手に松明を手にして、死体の顔の上に屈み込んでいた。」

(ともに動詞はσκύβω「屈む」、指示される状況もほぼ同じ)

A. については、間接的「接触」ととらえる事で、「接触」の範疇内に含める事が出来る（したがってσεが選択される）ように思われるかも知れない⁽⁷⁾。しかしながら、間接的にであれ「接触」があるならば常にσεが選択されかと言うと、そうではない。例えば「本」と「床」の間に「テーブル」が介在する場合、(5)は適用できない⁽⁸⁾。

さらに、πάνωと結びつく場合以外のσε/απόの意味的対立を考慮に入れるならば、A.B.C.に加えて、次の二点において「接触」は不十分であるように思われる。

D. 単純前置詞の用法の中で説明できない場合がある。

(9) Στεκόταν στο παράθυρο.

「彼は窓のところに立っていた。」

(必ずしも主語「彼」の身体が窓に「接触」している必要はない)

E. πάνω以外の副詞とσε/απόの結合例の説明に適用できない場合がある。

(10) Στέκεται μπροστά σ/από το ξενοδοχείο.

「彼女はホテルの前に立っている。」

(両者の区別は主語「彼女」が「ホテル」に「接触」しているか否かではない)

このように単純前置詞、複合前置詞の用法の説明には「接触」は厳密すぎる上に、(特にC.E.の説明のためには)より主観的な概念の導入が必要である。そこで、二つ目の概念の「近接」を検討してみよう。

2. 「近接」(Proximity, Nähe)

Fries(1988:138)は、現代ギリシャ語の前置詞の統語的側面を分析していく中で、次のような例を引用している。

a. ine [pano [s- to trapezi]

es ist oben +NÄHE Tisch (=auf dem Tisch)

b. ine [pano [apo to trapezi]

es ist oben -NAHE Tisch (=über dem Tisch)

ただし、ここでの意味特徴 \pm NAHE は定義なしに突然使用されている。さらに、p.141の脚注では次のように述べられている。

[\pm kontakt] kann auch im Deutschen nicht als relevantes semantisches Merkmal angesehen werden (z.B. ist ein Buch *auch* dann noch auf einem Tisch, wenn zwischen ihm und dem Tisch etwas anderes liegt, usw.) [イタリック体筆者]

「『接触』はドイツ語においても関与的な意味特徴とは見なされ得ない。(例えば本とテーブルの間に何か他のものが介在しても、本はテーブルの上に (auf einem Tisch) ある。)」

後者はドイツ語例に関する説明であるが、Fries はこれを現代ギリシャ語にも適用可能のように考えているらしい(イタリック体参照)。確かに、「近接」は、上述のA.の場合(例5参照)をもうまく説明すべく、「接触」の代わりに提案された概念のように思われる。しかしながら、この概念は定義を欠いている上に、基準点そのものが排除されて、その周辺部分のみが問題になっているような印象を与える。我々が必要とするのは、基準点への厳密な「接触」及び、より緩やかな「近接」をともに包含し、何らかの定義を有する概念である。しかも、上述C.E.の説明のためには、心理的(主観的)要素を含んでいる必要がある。このような概念として「領域」を検討してみることにする。

3. 「領域」(Region)

Miller & Johnson-Laird(1976:59)は、複雑な英語の前置詞の意味的対立を記述するに際し、「領域」という概念を導入する。

We will say that object x is in the region of object y when x is spatially close enough to y to have the sort of interactions with it that normally occur between x 's and y 's. This definition of region is deliberately vague, because the perceptual attributes of a region are correspondingly vague.

「対象 X が空間的に対象 Y に隣接しており、両者間に通常起こる相互関係がある場合、 X は Y の領域(region)内にある、と呼ぶ事にしよう。この定義は意図的に曖昧である。なぜならば、領域の知覚上の属性が同じように曖昧だからである。」

この概念は、「接触」と「近接」とを併せ含みつつ、これらより主観的であり、さらに二つの対象の相互関係に言及してある点で、 $\sigma\epsilon/\alpha\pi\acute{o}$ の記述に有利である。

まず、1.で示された問題点の内、A.は、「定位対象」と「基準点」の間に他の対象が介在する場合であった。上述のように、「接触」を「直接」的のみならず、「間接」的な場合にまで拡大すると、「間接接触」の中には、 $\pi\acute{\alpha}\nu\omega\ \sigma\epsilon$ が使われる場合と使われない場合

が含まれてしまう。しかし、「領域」概念を用いるならば、介在するものが、知覚上両者の連関を断ち切るほどの突出性 saliency⁽⁹⁾を有さないならば、「定位対象」は「基準点」の「領域」内にあるものと見なされて、σεが用いられ（「絨毯」が介在する場合）、この「突出性」があまりに大きいと、「定位対象」は「領域」内に納まりきらず、σεが用いられにくくなる（「机」が介在する場合）と説明される。

C.とE.に対する説明原理は同じである。(8-9)の区別は「接触」の有無とは見なし難いし、(11)においてはなおさらそうであった。そこで、より主観的な「領域」を用いるならば、「基準点」の「領域」内に「定位対象」が位置している、と話者が見なせば σε が、「領域」外であるとするならば από が用いられると言える。この説明は極めて主観的な要素を含んでいるが、同じ言語外的状況に二つの形態が用いられる以上、その意味の区別は現実の具体的な空間関係以外のところに求められなければならない。

「領域」の定義に含まれている「定位対象」と「基準点」の間の「相互関係」という要素は次のような事例の説明に際して有利である。(10)のように、μπροστά σε/από「～の前に」の区別は微妙で、一般に明確には記述されていないのであるが、筆者の観察によれば、「定位対象」と「基準点」の間に「視線」が介在する場合、(11-12)に見られるように、μπροστά σεの方が好まれる。「視線」は「相互関係」の介在を想定するのに重要な要素の一つであろうからである。

(11) Ο Ιταλός υπουργός... μπροστά στην τούρτα με τα εβδομήντα κεράκια.

「70本のローソクをたてたケーキの前のイタリアの首相」

(「首相」は「ケーキ」を見つめている)

(12) Στη χτεσινή παράσταση ο ηθοποιός έπαιξε τον Οιδίποδα θαυμάσια μπροστά στους πολλούς θεατές.

「昨日の上演で俳優は多くの観客の前でオイディプスを見事に演じた」

ただし、「視線」の不在が、σεの使用を妨げる訳ではないので、必要条件とは言い難い。

D.の単純前置詞の用法の説明も可能である。(9)では、たとえ「彼」が基準点「窓」に「接触」していなくとも、「窓」の「領域」内に位置している、と話者に認められる状況になれば適用される。實際上どの範囲を「領域」と見なすのか、は話者に依存しており、また、「定位対象」「基準点」となる事物の属性によっても異なるが、そのような変動性・曖昧性を有する機能語の用法を記述するには、ここで提案される程度の曖昧性を帯びた概念が必要であると思われる。

さらに、このように二つの前置詞の意義素を設定することで、0.で触れられた、前置詞と副詞との不規則な結合パターンが説明される。すなわち、そもそも基準点の「領域内」に通ずる意味を持つ副詞(κοντά「近くに」、δίπλα/πλάι「そばに」)は、もっぱらσεとのみ結合し、「領域外」に関連する場合(έξω「外に」、μακριά「遠くに」)はαπόを、この意義素に中立的な場合(απέναντι「向かいに」、γύρω「周囲に」)は両者を取り得る、と

言える。ただし、κάτω「下方」、πίσω「後方」では、この意義素は完全に中和されてしまっている⁽¹⁰⁾。

ところで、上で説明されなかったB.に対しては、さらに別の基準が必要であると思われる。これについては、5.で論じることにして、その前に、複合前置詞が移動・通過の動詞と共起する場合を考察しておきたい。

4. 複合前置詞と移動・通過動詞

以上で論じてきた例は複合前置詞が存在（またはある場所に於ける活動）動詞と結びつく場合であった。他方で、複合前置詞が移動動詞と共起する場合、σεとαπόの意義素はどう記述されるであろうか。Joseph&Warburton(1987)は、Comrie&Smith(1977)の質問表に従って、移動の概念をmotion-to、motion-from、motion-pastの三タイプに分け、各々の移動が「基準点」の「上方」「下方」「前方」等々で行われる場合、どのような形態により表現されるのかを記述する。Tachibana(forthcoming)では、同じアプローチを取りつつ、若干の修正案が示される。各空間概念ごとの詳論はこれらに譲るとして、ここでは、σεとαπόの意義素に論点を絞ろう。この二つの前置詞の意義素は、例えば、(13-14)のような例によって、典型的に示される。（図中の□は「蛙」の位置）

(13) Ο βάτραχος πήδηξε πάνω στο τραπέζι.

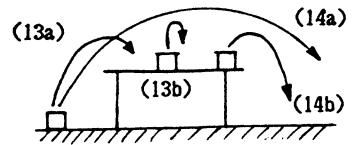
(a) 「蛙はテーブルの上に跳び上がった」

(b) 「蛙はテーブルの上で跳びはねた」

(14) Ο βάτραχος πήδηξε πάνω από το τραπέζι.

(a) 「蛙はテーブルの上を跳び越えた」

(b) 「蛙はテーブルの上から跳び降った」



「移動」という概念を、「始点」、「終点」及びその間の「行程」から成り立っているととらえるならば、二つの前置詞の選択の決定権を握っているのが「終点」であることはこの例から明らかである。移動の「始点」、「行程」の位置とは無関係に、その「終点」が定位のための「基準点」の「領域」内にあるならばσεが、「領域」外であるならばαπόが選ばれる、と考えられる。

この点は、現代ギリシャ語（およびその周辺の幾つかの言語）に特有の通過動詞 περνώ 「～を通る」のコロケーションにも当てはまる。この動詞は、動作主体の通過場所を(空間副詞)+από+名詞句により表す。

(15) Πέρασε μπροστά από το ξενοδοχείο.

「ホテルの前を通った。」

(16) Πέρασε πάνω από το βουνό.

「山の上を通った。」

これらにおいて、σεではなくαπόが選択される理由は、「領域」と関連づけて考えるなら

ば、二つの説明の可能性であると思われる。

F. 通過する主体の「行程」が基準点の「領域」の外にある。

G. 通過する主体の「終点」が基準点の「領域」の外にある。

しかし、F. は(17)のような例を説明できない。

(17) Πέρασε μέσα από το δάσος.

「森の中を通った」

この移動において動作主は基準点「森」のまさに「領域」内を移動しているはずである。すなわち、移動の「行程」は「領域」内にある。したがって、από の選択理由は、むしろ G. (「終点」が「領域」外) に求められなければならない。しかもこの説明は上述の移動動詞と結びついた複合前置詞の選択の説明と一致する。

5. 「絶対・相対定位」(Absolute/ Relative location)

「接触」が適用できなかった上掲の A.- E. の内、B. についてはさらに別の基準を考え必要がある。もう一度その例を見てみよう。

(18) Φορώ πουλόβερ πάνω από το πουκάμισο. (=6)

「シャツの上にセーターを着ている」

B. は、言語外的に「接触」があると認められるにも関わらず、από が好まれる場合であった。類似例としては(19)。

(19) Ο Στρατηγός άλλαξε πόδι, βάζοντας τώρα το δεξί πάνω απ' το αριστερό,

「(足を組んで座っていた)将軍は足を替え、今度は左足の上に右足をのせた。」

(18-19) は「上下関係」における定位であるが、同じタイプの定位が「前後関係」として現れる場合が(20)であり、ここでも από が用いられる傾向がある。

(20) (バスを待つ人々の列をさして)

X: Ποιος είναι ο Γιάννης ;

Y: Εκείνος που περιμένει μπροστά από τον κύριο με το καπέλο.

X: 「どの人がヤニスですか」

Y: 「帽子の男の前で待っている人だよ。」

(18-20) によって指示される状況には、通常の空間定位の例(例1, 2など)とは異なるタイプの定位が含まれているように思われる。すなわち、通常の定位、例えば(21)にあっては、問題となる二つの項「本」「テーブル」の内、前者は定位される対象であるが、後者は定位を成り立たせる基準点であるに過ぎない。知覚上、両者は同クラスの対象ではなく、「基準点」は「定位対象」ほどには焦点を当てられていない。このタイプを仮に「絶対定位」と呼ぶことにしよう。

(21) Τπάρχει ένα βιβλίο πάνω στο τραπέζι. (=1)

「テーブルの上に本が一冊ある。」

これに対して、ここで取り扱っている(18-20)では、二つの項の相互の位置関係に主眼がある。二項はいずれも同クラスの対象であり、理論的には、両者間の位置関係に互換性がある。こちらのタイプは「相対定位」と呼ぼう。「相対定位」では、定位対象と基準点がいわば同クラスの二対象として比較されており、「領域」とは無関係にαπόが選択される。二つの対象間の「互換性」に関しては、例えば次の場合を(18)と比べてみるならば、一層明瞭であろう。(動詞はともにφορώ「着る」。)

(22) περικνημίδα: περικάλυμμα της κνήμης, φορεμένο απευθείας πάνω στο δέρμα.

「すね当て: 肌の上に直接着る・下肢の被い」)

「相対定位」を含む(18)では、比較される二つの対象「セーター」「シャツ」が理論的には位置を取り替えられる(“「セーター」の上に「シャツ」を着る”)のに対し、(22)における「すね当て」と「肌」とは、理論上ですら、位置を交換した状況を想像し難い。したがって、(22)では、「肌」を基準として、対象「すね当て」が「絶対定位」をなされている。そして、その対象が「領域」内に位置しているため、σεが選択されている、と説明できる。

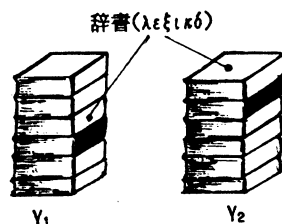
二種類の定位を例証する他の例として(23)を見てみよう。

(23) X: Πού είναι το λεξικό σου;

Y₁: Είναι πάνω από το μαύρο βιβλίο.

「貴方の辞書はどこですか」

「黒い本の上です」



積み重ねられた本の山の内部に置かれた一冊を指示する場合、(23)のようにαπόが好まれるのは、上述の「相対定位」の説明から理解され得る。「辞書」と「黒い本」とは同じクラスに属する二つの対象であり、相互の位置を取り替えた状況を想像するのは容易である。ところが、定位対象の「辞書」が本の柱の一番上にある場合、何人かの話者は、απόに加えて、σεも適用が可能であると答えている⁽¹¹⁾。

(23') Y₂: Είναι πάνω σ/από το μαύρο βιβλίο. 「黒い本の上です」

この興味深い回答は、同じ言語外的状況が、「絶対定位」、「相対定位」のいずれにも知覚され得ることを示唆している。対象が柱のもっとも上にあり、その下にある対象とは異なるレベルで知覚され易い場合、定位対象はいわば知覚のスポットライトを浴び、対照的に、他の対象は定位のための単なる基準として背景へと追いやられる。かくして、(23')は、(21)と同様「絶対定位」としてとらえられ、この場合は対象の「領域」内の存在がσεを選ばせることになる。(但し、「相対定位」の可能性が閉ざされてしまう訳ではない。)

6. 結論

本稿では、単純前置詞と複合前置詞の両用法におけるσεとαπόの意義素を、空間指示の用法を中心として考察してきた。そこでは、二種類の意味基準が絡み合っているのが観察

された。まず、二つの対象が、理論上はその位置に関して互換性があり、同クラスに属するものとして知覚され、両者の相互の位置関係が問題となる場合（相対定位）、*από* が好まれる。これに対し、二つの対象のうち、一方は定位の対象として知覚の中心に置かれているが、他方はその定位を成り立たしめる基準を提供する背景に過ぎず（したがって、二者は同クラスには属さず）、位置の互換性も想定し難い場合（絶対定位）、今度は基準点の「領域」が*σε*と*από*の選択の決め手となる。すなわち、対象が基準点の「領域」内に存在する（或いは運動する）場合、*σε*が選択され、その外の場合、*από* が選ばれる。対象が移動する場合には、移動の「終点」が基準の「領域」内であれば*σε*、外であれば*από* が使用される。簡略に表示すれば以下になるよう。

<i>σε</i>	<i>από</i>
絶対定位 存在・運動が「領域」内 移動の終点が「領域」内	絶対定位 存在・運動が「領域」外 移動の終点が「領域」外 相対定位

από は、「絶対定位」・「領域」外、及び「相対定位」という意義素を併せ持つことになるが、両者の間には何らかの意味論的関連があると予想される。このような関連については次稿に譲りたい。

註

* 本稿は平成五年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

ここで提示された考えに対し、有益な批判を与えて下さったPeter Mackridge 博士（Oxford 大学、UK.）に御礼申し上げます。

- (1) 関本(1968:141)、Mackridge(1985:203)。
- (2) その他 *σαν, χωρίς, ως* (Mackridge, 1985:203)。なお、本稿では、純正語に多く保持されている古代語伝来の前置詞は考慮されない。
- (3) 関本(1968:144)、Mackridge(1985:205)。
- (4) 本稿で使用された例は、筆者により、新聞、雑誌、小説より収集されたものである。
- (5) 関本(1968:144-146)、Mackridge(1985:205)、橘(1989:57)。
- (6) Mackridge(1985:210)、Joseph&Warburton(1987:142-3)。
- (7) Peter Mackridge 博士の示唆による。
- (8) Miller&Johnson-Laird(1976:387) 参照。

- (9)Saliency についてはHerskovits(1981:316)参照。問題がA.のみならば、この概念だけでも十分に説明可能である。
- (10)橘(1989:60,62)。
- (11)筆者がギリシャ・アテネとイギリス・オックスフォードで行った小さなインフォーマント調査に基づいている。

参考文献

- Comrie,B.& Smith,N.(1977) *Lingua Descriptive Studies: Questionnaire.*
Lingua 42,1-72.
- Fries,N.(1988) *Präpositionen und Präpositionalphrasen im Deutschen und im Neugriechischen : Aspekte einer kontrastiven Analyse Deutsch-Neugriechisch.*
Niemeyer.
(1991) "Prepositions and prepositional phrases: a contrastive analysis."
In Rauh(1991)53-76.
- Herskovits,A.(1981) "On the spatial uses of prepositions in English."
Linguisticae Investigationes 5,303-27.
- Joseph,B.D.& Philippaki-Warbuton,I.(1987) *Modern Greek.* Croom Helm.
- Mackridge,P.(1985) *The Modern Greek Language.* Oxford UP.
- Miller,G.A.& Johnson-Laird,P.(1976) *Language and Perception.* Cambridge UP.
- Rauh,G.(ed.)(1991) *Approaches to prepositions,* Gunter Narr Verlag.
- Tachibana(forthcoming) "Spatial Expressions in Modern Greek." *Μελέτες για την Ελληνική γλώσσα.*
- Wege,B.(1991) "On the lexical meaning of prepositions: a study of *above, below* and *over.*" In Rauh(1991)275-96.
- 関本 至(1968)『現代ギリシア語文法』大阪: 泉屋書店.
- 橘 孝司(1989)「現代ギリシア語の空間指示表現について」『プロピレア』1,57-66.